妹尾義郎の日蓮信仰

―大正五年から七年の日記を手がかりに―

三輪是法

はじめに

妹尾義郎（一八八九～一九六一）の日蓮信仰について、明治四十二年（一九〇九）から書き始められる日記をもとに、大正四年（一九一五）までの事件とそれに伴う内面に見られる動向を確認した。[1] 本稿では、それ以降、大正五年（一九一六）から七年（一九一八）までの日記に基づき、妹尾の出家以降の出来事と心理的動向について確認していきたい。

一、母の死

大正五年の元旦を、妹尾は釈日研のもと、釈迦孤児院で迎えた。千ヶ寺巡礼を達成するために家を出発して二ヶ月後のことである。身体の衰弱は相変わらずであったが、孤児院の子供たちの姿に慰安され、気分的には穏やかであった。一月十一日の日記には高山樗牛が記した日蓮についての説示を引用しながら、次のように述べている。

南檐に小春日の光を浴びつゝ樗牛全集を繙く、其一節に、／今やこの北海の孤島に明日をも知らぬ命とはなりたるぞ。あらうれしや古聖賢だに読み給はざりし妙法の極意をば、今ぞ日蓮こそは読みたんなれ。／とかの法難この法悦、思へば我等が苦難などは物の数ならず、妙法色読の御師子吼に感ぜらんや、振はざらんや。遇はさせ給へ三障四魔。[2]

妹尾は自らの病歴と日蓮の法難とを比肩し、いまだその比ではないことを自覚している。しかし、自身は他の僧侶、すなわち妹尾の表現を借りれば「畜盗法師」と同一ではなく、そのためには止暇断眠して精進しなければならないと自戒している。

そんな最中、妹尾のもとに家から知らせが届く。母親が重病であるとの知らせであった。身命を賭して家を出立し、二度と家には戻らないと決意した妹尾ではあったが、自分の看病に長年煩わせ、親不孝をしたままであるという自覚と、回復の見込みがないという再信ゆえに迷悶した末、日研の母に許可を得て、帰路に着いた。

衰弱した母親との再会を果たした妹尾は、五月六月とともに時を過ごした。母親を慰めていたのは、好きな読書と往生を願って唱える念仏であった。そんな母親を看病しながら、妹尾は法華経と日蓮のことばを説き続けた。やがて、母親は自ら妹尾の読経を求めるようになり、結果、病床に釈日研の巡錫を得て、法華経へと回心する。[3]

七月一日以降、妹尾は油木温泉へ四回目の湯治に出かけていた。そこに、母危篤の知らせが届く。七月二十一日のことである。急いで帰宅したものの死に目に会うことは叶わず、母親は化を他に遷した。

車を下りて静に上り、永き眠りに就き給へる母君の床べに侍り、空しく冷え給ひし御遺骸をうちまもる。病身にして謝恩のみとりも心にまかせず、御臨終にもえ侍らざりし不孝の児。許しませよと口ごもりしも今は甲斐なし。

白布をもたげて御容顔を拝せば、肉こそ落ちたれ、さながら眠られしまゝの御気色、二旬の前、出湯の別れにやさしき御言葉をたまひし御口元の、など今もの言わたまはざる。語らはんも今は片言のみ。噫、遅かりしおそかりし。何ぞおそかりし。香をたいて静に唱題し回向せしのみ。[4]

七歳にして父親と死別した妹尾にとって、早くから家業を継いで家族を支えていた長兄・勇太郎は厳格な父親的存在であったろう。日記には、長兄に対して病弱である身を慙愧することばが頻繁に見える。それに対して妹尾を慈悲深く見守っていたのは、母親と兄嫁であった。八月の日記には、追慕の念治まらず、日蓮の遺文から母への想いを綴った多くのことばを引用し、弔辞としている。[5]

その後も母への懺悔の念が幾度となく来訪する。大正六年（一九一七）二月二六日付の日記には夢記がある。

夢に亡母が餓鬼道に沈淪せられ痩犬の如き姿となられしを見る。母の色心は即ち我が色心なり。聖訓に、「親を救ふものは子なり」とあり。我修行不足にして遂にこの悪相の夢を見る。信心を励みて自己の成仏即親の成仏といふ金言を実得し度う思ふ。[6]

死別してもなお、母に対して懺悔する心は夢となって現れ、その想いを払拭するかのように、妹尾は日蓮のことばに依拠し、自らの信仰によって亡母に対する恩返しができると信じて、信仰の世界に没入していくのである。

二、次兄の失明

身体は相変わらずであったが、妹尾の信仰心は止まるところを知らず、熱心な同志を集めて「日蓮主義鑽仰会」なるものを立ち上げて、迷信ではなく正しい信仰を吹聴しようとしていた。しかし、周囲の人々はもとより、家族にま

で「日蓮狂」と誹謗中傷され、妹尾の病が一向に好転しないことから、信仰の価値を疑い冷笑する者もでる有様であった。[7]

十一月二十八日、鑽仰会開会の日を機に、妹尾は断食を行う。

丁度、今日、日蓮主義鑽仰会を開いた日からそつと断食を始めたが、家兄の不興を買うてやむなく中止したものゝ、とても此の儘ではすまされない。[8]

この時の日記には、長兄に対する気持ちに変化が見られる。それは深まる信仰に基づく抑圧からの解放といえるであろう。長兄の不興に対する気遣いよりも、自己の信仰への信頼が絶対化し始める頃でもあった。

一度は断念せざるを得なかった断食行を十二月八日から一週間再開した結果、蓄膿症で全く臭覚がなかった鼻に機能が戻る。十二月十四日の日記にはその喜びが綴られている。

床中、法華経を読誦したり、唱題するのが何よりの慰安であった。決して人が想像するやうな苦しいものではなく、次第に崇高な境地が開けて、精神が著しく澄徹したやうに感じた。（中略）断食の第三日目、ふと近所の焼肴の香気が鼻を衝いた。不思議な思ひをして再び鼻先を蠢かして嗅ぎこんでみると、したゝか匂ふ。嗅覚が復活した！[9]

「病も善知識」[10]と記す妹尾にとって、法悦の瞬間であった。やがて、こうした経験から、妹尾に日蓮の弟子になったという自覚と、医学では癒されることのない病の下で命を繋げられていることが法華経の力であることが認識されるに至っている。[11]

妹尾は自らの病の原因について、延いては家族が不健康であることの原因について次のように記している。

誠に悪業の深い身神だ、罪の身といふことを自覚してゐる。罪障の消滅をあけくれ祈らねばならぬ。自分かたの家人が誠に病人多いのも、何等かの因縁と思ふ。大兄の御心痛もさこそと察しる。願くば一切の罪を一身に引きうけ、苦しんでなやんで家の幸福を祈りたい。[12]

過去世の悪業故に今現在の不幸がある。一家の悪因を断つために自らが法華経を信仰し、唱題しなければならない。妹尾は病弱という身体的マイナスに基づく自己否定をくり返すなかで、信仰を深め、家族の悪業を一身に背負う決意をする。そうした自覚に拍車をかけたのが、次兄・定太郎の失明であった。

大正六年（一九一七）六月、予てより東京で治療を受けていた次兄が、失明して長兄と帰郷する。そんな兄の姿を見た妹尾は、同情の念を懐きながらも、不退転の信仰を決意している。

唯だ此の上は信仰の外はない。強盛な信心をして、謗法の罪科をのがれねばならぬ。決して此の病難を無意味に葬ってはならぬ。これらは皆吾人に道心を起させ、信仰を増さしめる無二の笞である。来れ困難、我に信仰の力あり。「日蓮は泣かねど涙ひまなし」。一家の罪障を一身に背ひ、此の身を以て信仰生活に入らう。[13]

他方次兄は眼病平癒を薬師如来に祈願する日々であった。そんな次兄に対して、妹尾は病を気遣いながら信仰を改めることを勧めている。妹尾の苦悩は法華経の行者として自覚されていくことを根底に、長兄次兄が不幸になっていることにも言及されていく。すなわち、長兄が仕事で苦労を重ね、次兄が失明したのは謗法罪が原因であり、その謗法を止めさせることができない自分の不甲斐なさを教誨するに至るのである。そうした記述は何度もくり返されながら、信心強盛に妹尾家謗法の業因を滅するための一層の信仰を妹尾自身に促していく。

定兄眼疾の為殆ど失明せんず、誠に定兄の不幸なるのみならず一家の災難いふばかりなし。されど宿善の為か一

家挙って正法に帰し、唱題して滅罪懺悔せんとし漸く其一歩を始めんとする時、夫れ悪鬼入其身か、多怨難信か難信難解か、忽ち不知仏方便随宜所説法の時代濁の嘲罵は来り、家兄の善意の忠告といふ姿を表はして唱題の見合せとはなりぬ。あゝ謗家の科を奈何とせん。／従来度々申入れぬ。聖者は三度諫めて聴かれずんば山林に入ると申されぬ。力不及将にのがれ出づべき秋なるや。立正なくば安国は望むべからず、仮面の平穏のみ、一時の同情のみ。眼は薬師如来か、言ふも詮なし悲し哉。世智僻のみ、計我のみ、我は無智なり、故に仰いで大聖の金言色読に帰命せんのみ。／「此の身は従へらるゝとも心は従ふべからず」法華経の教には家も遂い出さるべし。所詮法花経によって長らへし身、捧げつる凡身「はがみして」忍ぶべきのみ。つゞいて進むべきのみ。血と涙とに読むべき此経、一難は一難より我に大信念を増さしむるのみ。謗因は決して善果を結ばず。一家を善導すべく離謗せしめんとせし願業も遂に駄目か。二階に上り静かに宝前に端坐して読経唱題す。唯熱涙の滂沱たるのみ。聖祖幸に我か至誠を知しめせ。(14)

病弱な自分、兄弟の不幸という要因のほかに、もう一つ社会的敗者としての妹尾の自覚が確認できる。それは同窓生の出世成功に対して、病の為に学問を諦め、挫折した自分の人生を意味づける物語として法華経と日蓮のことばが語られている。

そうして自分の落伍と、友の成功とを比較する。あの椅子にかける身が偉いか、田舎に一生を送るのが賤しいのか。あゝ自分の人生観はこゝから始まる。春夜の思ひ！うれしい人生、悲しむな吾生を。自分の身上を思案するよりは公益について一つでも現在の自分に叶ふ範囲内に於て尽さんと念ぜよ。そこに自己救済の開顕発展の光を認める。絶望するな。絶望といふ事は死滅を恐れる人の口から出る言葉だ。即ち死亡は絶望の最後と思ふてはな

らぬ。死滅を恐れる所から一切の愚作が生じると思ふ。勉めて大聖人の教義に接して自己を向上させ、安慰（やすらぎ）を得て、一簀をも法の為献げねばならぬ。エクセルシャーだな。いつも念じよう、自分の一挙動が少しでも世の為、人の為、家の為になるやうにと。そして安心して、この持ちあましたやうな病身が、長い遠い寿命の人となる世界にゆく事が出来るならうれしい事ではあるまいか。霊山へ参る船は正しく日蓮聖人の御人格を渇仰して、その金言を信ずる時に得られるのだ。かこつまい。悲しむまい。唯だ此の身を献げて法の為になる方へ〳〵と運んで行かう。三障四魔は来って居るやう思へる。此の難障は皆試練に他ならぬ。法悦を得る代償だ。悲しむまい。愚痴をこぼすまい。／心に少々法華経を信じつれど畜身の浅ましさ、先業の執着すること深甚なる―。涅槃の義を体得せざる乎。涅槃経の一節を記して戒む。[15]

若き日を共に過ごした友人の輝かしい人生に対して、病の為に「落伍」者として田舎で過ごす自分の人生。それを逆転させる言説が日蓮遺文であり、法華経である。自分の人生は法華経の行者として生きていくためにある。ルサンチマンを浄化し、転化させながら、深く沈静していく妹尾の信仰が看取される。やがて妹尾は自らの信仰形態を「色読」と呼び、日蓮の法華経信仰との同一性を感受するようになっていく。

法華色読、これが自分の一生の目的である、自分の一生を信仰の結晶として見たい。秘密神通の力に信頼して自分の小さい才覚を捏ね廻して煩悶してはならぬ。大観念とか大覚悟とか言ふて見ても自分はとても出来ぬ。それよりも大聖の金言に信頼して晏如たる方が賢い。然り前後中間南無妙法蓮華経の七字である。徹頭徹尾題目の修行だ、別の才覚無益なりと。[16]

法華信仰は日蓮のように色読でなければならない。妹尾は一生を通してただ色読実践の生き方を選択し、自分の人

生を肯定的に意味づけしながら、信仰を深めていった。

三、而　立

大正六年の日記からわかることは、妹尾の胎動である。妹尾家に降りかかる不幸を払拭するために、信仰を深める一方、この年の七月から病を押して長兄を手伝い、家業の酒造りに打ち込む。

下男と共に酒樽の手入れをして終日労働す。皆是法華経の為に捧ぐる労働なりと思はゞ何の苦痛か是れあらん。知恩報恩の心掛なき人は禽獣と同然、感謝より来る献身的報勤こそげに尊きものにこそ。畏れ多けれど聖祖の御訓勅を我家の今日にもち来りて。[17]

病との戦いに明け暮れ、自分の身体のことで手一杯だった妹尾が、家業のこと、次兄の眼病のことなどを経験しながら、積極的に家族に対してできることを行動化していく。

今日もカンカンと照りつける。午後例の如く田圃で日光浴や冷水浴を試みる。此の静かな大きな而も大権威ある大自然の懐に入って逍遙し、休息し、瞑想すると、自己の卑小さ分子が一切明かに照り出されて、内心に堪へ難い罪悪感が勃々と湧いて自分をせめる。消えもやり度い程に自己の罪障観念が高ぶりて来る。そして其底に自然の慈悲深い摂理の秩序と存してゐるのを思はざるを得ぬ。法性と迷性の衝突の苦しい決戦を見ねばならぬ。境遇！凡夫は境によって移り易い。偉人は境遇を支配するといふ。さるにても四囲の支配の力強さを痛感する。[18]

それは内面的・観念的に常に煩悶し続ける一人の人間が、労働という身体と外的世界との接触によって、自然の偉大さを知り、自己の卑小さに目覚めた軌跡でもあった。その思いはやがて法華経と日蓮遺文とに問いかけ、自問自答

する日々からの離脱へと妹尾を押す。

翌大正七年（一九一八）、妹尾は数えで三十歳を迎える。「而立日史」と題されたこの年の正月の日記には独立への想いが綴られる。きっかけは長兄からの忠告である。長くなるが引用してみよう。

立つべき年にあたり心に画するもの多々なりしが、之をして一層確念悱憤せしめしは昨夜家兄頂きし忠言なりき。夫れ憤すべし悱すべし、愚蒙と雖も一片のより意地猶存す。一切の苦言漫罵皆是自省の好機なり、自発の良友たり。昔釈尊は阿私仙に仕へて成道せさせ給ひ、聖日蓮は平の左ヱ門によって法華経の行者とならせ給ひき。これはまた色を異にすれど家兄こそ吾が良師、怠り勝ちなる予を精進せしめ、倫安姑息に流れ易き生活より、自強励行の心を憤起せしむ。「情存妙法故身心無擬倦」、愈々信仰を強めて終生呉下の阿蒙たるべからず。／独立独行いかに尊く有難きものなるよ。そこには自由あり。寄食、いかに腑甲斐なき生存なるよ。男子正に立つべし。野の鳥は蒔かざれども生くるにあらずや、生くるにあらざれば死すべし。偸安の生存を欲せず。然り矣、銘すべし。二兎を追ふものは一兎だに獲ず、と。躊躇すべからず、小さき涙を出すべからず、棄恩入無為、是大孝。／雪もふれ降れ風も吹け、信の一字によって吾生を始終すべきものぞ、所詮は濁中に一滴の身、信の大海に入って始めて大海の用をなさん。嗤はゞ嗤へ、譏らば譏れ、毀誉是すべて大慈の仏作、「うれしきにつけても涙、悲しきにつけても涙」。／（中略）「百に一つ、千に一つも日蓮が義につかんとをほさば、親に向かっていひ切り給へ。親なればいかにも順ひまいらせ候べきが、法華経の御かたきになり給へば、つきまいらせては不幸の身となりぬべく候へば、すてまいらせて兄につき候なり。兄にすてられ候はゞ、兄と一同とをほすべしと申し切り給へ。すこしもをそるゝ心なかれ。」（注、日蓮遺文中兵衛志殿御返事）／家兄は我第二の父である、大姉は第二の母である。

此の両尊にこそ孝養はつくせ。別に孝行とてはなきものなり、さはれ其孝行報恩の形式を深く考へねばならぬ。自分は信仰を励んで小怙を去って大孝のあとを慕はねばならぬ。あゝ数年の苦衷はこれであった。三障四魔、決心せねばならぬ矣。[19]

妹尾は長兄を「第二の父」とも表しており、病弱であるが故に絶対服従であった。しかし、今回の忠告に対しては「憤すべし悖すべし、愚蒙と雖も一片のより意地猶存す」という反発の念を起こし、偸安に過ごす自分を内省しながら、長兄に対する孝行報恩として信仰の道をもって独立すべきことを覚悟している。そこに法華経や日蓮遺文の言説が関与していることは言うを俟たないであろう。信仰の深まりとともに妹尾の個が確立した結果であり、妹尾自身、今までの覚悟とは異なることを記している。

妹尾の決心に反して身体の問題は解決せず、一月十八日の日記に癌についての説示が確認できる。一年前に発症した胃の痛みが再発したことについて、癌化しないかという懸念を記している。それ以降の日記には、覚悟の信仰宣言と色読の自覚が日々綴られていく。

生年三十の男一匹、観念の土壇に安住せねばならぬ時、男とならうぞ、男となって死なうぞ、わるびれもせず、軽はずみもせず、ここ一番信仰の命のまゝに不思議に生き長らへた身を捧げまつらう。御題目を唱へて逝かうぞ。[20]

長兄への報恩のために独立しなければならない。他方、胃の工合が芳しくない。こうした妹尾の苛立つ心理を超克させていたのが堅固なる信仰であり、妹尾の信仰を支えていたもう一つの要因が田中智学の日蓮主義であった。田中智学のことばは、法華経と日蓮の思想を正義として行動化するために必要なもう一つの言説だったのである。

四、日蓮主義

大正四年の湯治で宿の主人に勧められたことを契機に、妹尾は日蓮門下の新しい運動組織である国柱会を創始した田中智学の著書や、機関紙である『国柱新聞』に触れるようになっていた。[21] その頃から、日記に「日蓮主義」ということばが使われるようになる。

自分は深烈に十二因縁の法門を感じた。迹門十如是の実相に恐れ入るのである。業火燃え盛って、無明の闇に迷ひ行く心地がする。静慮すればする程罪障の深い身であることを悲しむ。彼岸へそも何時いかにして到着し成仏出来るのであらう。煩々悶々安眠もなり兼ねる。止暇断眠して之を案ぜよとの聖訓に思ひ入って恐懼に堪へない。嗚呼こゝに唱題の修行がなかったなら自分は煩死悶絶していたであらう。日蓮主義を知らなかったなら山林に隠退して了ったであらう。あゝ御題目の功徳により纔(わずか)に生き長らへてゐる心地がする。充実せる生、唱題の修行、妙、不可思議の大法を信じて、本仏に救はれねばならぬと痛切に思ふ。[22]

妹尾の内面的葛藤を、一層法華信仰・日蓮信仰に向け、色読弘経の自覚を促した契機として、田中智学の日蓮主義を看過できない。それは著書や機関紙の購読、国柱会会員との対話といった間接的言説ではあったが、妹尾に「益々正しき法花経主義、日蓮主義の必要を認め」[23]させる大いなる影響をもつものであった。

病のため田中智学に会えずにいた妹尾は、三月二十四日、紹介状を手に上京を果たす。病のため第一高等学校を中退して以来、八年ぶりの東京であった。三姉の家に滞在しながら、妹尾は田中智学との面会を待った。しかし、面会が実現することはなかった。

妹尾は上京以来、国柱会の大会に参加し、会員と交流しながら、信仰論を談ずるだけの日々を送っていたが、四月に転機が訪れる。本多日生の著書との出会いである。妹尾は本多の著書に触れ、日記に一節を引用するまでになっていた。[24]

本多日生は顕本法華宗の僧侶で、明治二十九年（一八九六）に僧侶と在家者の集団である統一団を組織し、浅草の統一閣を拠点に活動していた。四月二十一日、統一閣で直接本多の講演を聴いて啓発された妹尾は面会を確約し、[25]五月十九日、本多を来訪し、信仰上の煩悶を打ち明けて、指導を請うた。

一つ記述しておきたいことは、本多との面会に先立つ一ヵ月程前、四月二十五日に統一閣に当時の庶務主任である高木本順[26]を訪れ、自分の信仰体験を語っていることである。その際、妹尾は「日蓮主義的批判」を受ける。

統一開顕は日蓮主義の生命即法華経である。大を取り小を捨てる、義につき情を捨てる、浅易を避け深難に就く、皆日蓮主義の情念である。蓋し小、浅、情等を捨てるのでなくて、之を開顕し真生命を附与するのだと思ふ。此の見地から自分は長らく煩悶してゐた、自分の進むべき取るべき道を決定せねばならぬ。愈々自分は宗教家として全生命を捧げよう。之が自分に最も適した道と確信する。小我を捨てゝ家の為、人の為、国の為に涓滴の報恩をもしよう。[27]

高木の指導によって「開顕」の包括思想を知り、改めて化他の報恩を実践する宗教家たらん道を自覚する。その理由として、自分の適性、これまでの日蓮仏教との因縁、家族の謗法、日蓮宗内の憂うべき現況という四項目があげられている。観念的に思惟し続けてきた妹尾にとって、高木の指導はその内面的殻を破る経験であったと考えられる。つまり、妹尾の常に内に籠もっていた思索の旅は、ようやく実現する方向を示したことになる。しかし、それ以降し

ばらくは信仰が深まるにつれて、煩悶が続く。

妹尾は唱題修行、色読の実践を生涯の目的とする宗教家を目指していた。したがって、経済的に潤い、遊戯雑談に耽る当時の僧侶を「畜盗法師」と蔑称し、批判したのである。殊更日蓮宗内の僧侶への批判は手厳しいものだった。ここで問題となるのは宗教家として日蓮主義を実践しながら、いかに生活を営んでいくのかということである。五月一日の日記には居候する家の姉から言い争いをしたことが記されている。

姉と一寸物言ひを起し不興、然し静慮すれば皆自分の罪である、腑甲斐なく思はれるのも忍ばねばならぬ。此の胸の煩悶を知るべくもない姉には野良苦良した者に見えるであらう。金銭に慾がない、時世に不適な奴と言はれもせう。然し皆善智識だ。歓喜の念を起して怨恨の心を起こしてはならぬ。[28]

仕事もせず、信仰信仰と言ってばかりで何もしない弟に対して不甲斐なさを感じた姉が言った言葉は想像に難くない。それが現実であった。妹尾の煩悶は信仰だけで浄化されることがなくなったのであろう。

五月十七日に本多からの手紙が届き、十九日午後五時からの面会を許された妹尾は、本多との面会が実現したその日、この煩悶について打ち明け、指導を受けている。その結果、一大決心をする。

自分は愈々決心した。在家として外護の任に当らう、起家の人、中興の人として。あゝ自分が数年来の希望はこゝに捨てゝ！暗涙滴々、名倉に帰る足は重かった。[29]

本多の「日蓮主義的批判指導」によって、僧侶である妹尾自身がもつ、伝統仏教教団の僧侶批判に繋がる信仰の正当性を再確認すると同時に、出家者として正義を実現することが困難であることを知る。その結果、妹尾は在家として日蓮主義の信仰を実践することを決意する。それは理想と現実の乖離がもたらす新たなる苦悩の始まりであった。

自ら身命を惜しまずといふことを事現色読せねばならぬ。今からだ〳〵、決して絶望したり悲観したりしてはならぬ。感謝して感謝して将来に出来だけの孝悌をつくし、仏恩に報ひねばならぬ。不思議の存命を深く感謝して真に不惜身命努力をしよう。頭に日蓮上人を戴き、口に妙法の題目を唱へ、主の為にも仏信の為にも世の為にもよかりけり〳〵と言はるゝやうに、策励し精進せねばならぬ。[30]

六月に入ると、妹尾は就職活動を行い、二十日職に就く。まさに在家者として日蓮主義を実践していく第一歩であった。

小結

大正五年から七年までの妹尾の心理的動向を確認してきた。この間、母の死、病との格闘、兄弟の不孝と妹尾家の一大事が続く中で、妹尾の日蓮信仰は堅固なものとなっていく。こうした不孝は妹尾家謗法の故であり、自らの信仰を深めると当時に家族の信仰を改めさせなければならなかったからである。また、病のために社会的地位から転落してしまった自分についても、負から正へ意識を転換する信仰を看取できた。妹尾はまさにここに日蓮との同一性を見ている。すなわち、色読という日蓮独自の信仰を自身が実践しているという自覚に至り、一層の信仰へと拍車をかけていく。

この一連の意識改革は、妹尾の周囲に出来するさまざまな事件が法華経と日蓮遺文という物語によって表象化されることでなされていく。そして、ここにもう一つの要因が確認できる。それが田中智学の言説であり、本多日生の指導である。妹尾は田中と相見えることはなかったが、著書などから大きな影響を受けた。本多とは直接教えを請うこ[31]

とができ、強く導かれる。この二人の存在は表象化において、それを強化し、決定化していく役割を持っている。具体的には、妹尾の内面的信仰を理想として止めず、行動に移行させることであり、日記の筆致も内面的思索の記述から外的事項の記述へと変貌を遂げていく。こうした特徴は大正九年以降の妹尾の日記に顕著なのだが、ここでは詳説せず、今後改めて論じてみたい。

注

(1)『インド仏教史仏教学論叢』(『仲澤浩祐博士古稀記念論文集』、平成二十三年二月二十六日、山喜房佛書林)三一五～三四一頁。

(2)『妹尾義郎日記』第一巻(国書刊行会、一九七四年)二七一頁。以下日記の引用については第一巻の場合、巻数を示さず、頁数のみを記す。なお、「／」は原文改行を示す。

(3)『妹尾義郎日記』二七三頁。

(4)右同。

(5)具体的には『開目抄』(五四四、五九〇)『上野殿母御返事』『上野殿御消息』(一一二四)『刑部左衛門尉女房御返事』(一八〇七)『新尼御前御返事』(八六五)『光日上人御返事』(一八七九)である(括弧内は『昭和定本日蓮聖人遺文』の頁数)。

(6)『妹尾義郎日記』二九四頁。

(7)『妹尾義郎日記』二七五頁。大正五年九月の日記による。

(8)右同。

(9)『妹尾義郎日記』二七六頁。

(10)『妹尾義郎日記』三二三頁。大正六年六月十八日の日記による。

(11)『妹尾義郎日記』二七八頁、大晦日の日記。「病によりて道心は起り候とな。値ひ難き仏法に値ひて、今や日蓮が弟子とはなったるぞ。(中略)吾人が五体は、正しく医学の未だ知らざる—恐らく信念の外永久に知らざる、不可思議なる妙作妙用を有

す。経の所謂、如来秘密神通の力とは即ち是れならずや。」

(12)『妹尾義郎日記』二八三頁、一月八日の日記。

(13)『妹尾義郎日記』三二一頁。

(14)『妹尾義郎日記』三二三頁。六月十八日の日記。

(15)『妹尾義郎日記』二九五頁。大正六年三月三日の日記。

(16)『妹尾義郎日記』三七六頁。大正七年三月九日の日記。

(17)『妹尾義郎日記』三二六～七頁。七月六日の日記。

(18)『妹尾義郎日記』三三一頁。七月三十日の日記。

(19)『妹尾義郎日記』三六〇～一頁。一月六日の日記。括弧内の注は日記編者による。

(20)『妹尾義郎日記』三六四頁。一月二十三日の日記。

(21)『妹尾義郎日記』二六一頁。七月末日の日記。

(22)『妹尾義郎日記』三七七頁。三月十六日の日記。

(23)『妹尾義郎日記』三八二頁。四月三日の日記。

(24) 右同。四月四日の日記に、『信仰心の徳と力』を抜粋引用している。その後も同月七日の日記には『日蓮主義の心髄』を施本されたことが記載されている。

(25)『妹尾義郎日記』三八六頁。本多への紹介の約束については二十二日の日記に記されている。本多の著書を妹尾に施本し、紹介を約束した人物については四月一日の日記に「青山五丁目の安川といふ老母」（『妹尾義郎日記』三八一頁）と記されているだけである。しかし、以降妹尾は頻繁に安川宅を訪ね、日蓮主義や信仰について安川氏と談じている。

(26) 大谷栄一著『近代日本の日蓮主義運動』（二〇〇一年、法蔵館）二六八頁参照。日記には「高木師」と記されているだけである。

(27)『妹尾義郎日記』三八七頁。

(28)『妹尾義郎日記』三八九頁。

(29)『妹尾義郎日記』三九二頁。

(30)『妹尾義郎日記』三九三頁。五月三十日の日記。

(31) この「表象化」という言葉については、詳説しなければならないだろう。しかしここではフランス語の représentation がもつ「表象・代理」という意味をあげることに止めておきたい。